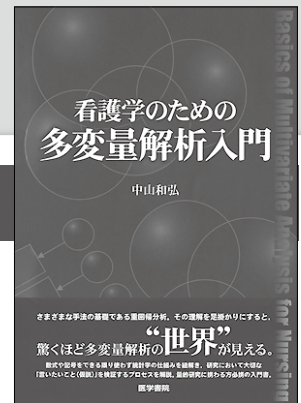


看護学のための多変量解析入門

著：中山和弘
B5判・328ページ
定価：本体4,200円＋税
発行：医学書院（03-3817-5667）



多変量解析の魅力に引き込まれる 随一のテキスト

評者◎小松浩子 慶應義塾大学看護医療学部・大学院健康マネジメント研究科教授／看護医療学部長

本書の発刊を知り、すぐに頭に浮かんだ言葉は、「待っていました！」です。すでに、研究室の本棚には多変量解析に関するテキストブックが複数並んでいますが、どれもきれいなままで、複雑な数式やピンと来ない例題にギブアップした形跡があります。本書は看護研究を学ぶものにとって、かゆいところに手の届く格好のテキストブックといえます。私のお気に入りの点を挙げながら、特徴を紹介します。

第1は、看護研究のもどかしさを紐解く統計手法を、わかりやすく解説している点です。統計学のイロハといえるデータ、変数、仮説、分布といった統計学の基本的知識を、看護研究の観点からわかりやすく積み上げ式で学べます。長年、看護学生や看護研究者に統計学を教えている著者だからこそこの解説、例示が満載です。難しい統計学が「わかった！」となっていくので、どんどん読み進めることができます。

第2は、多変量解析に挑むために2変数の関連の分析をきちんと学べる章が設けてあり、足場が固められる点です。看護研究では複雑な現象を紐解いていくので、基本となるデータの組み合わせ（量と量、量と質、質と質）をどのように分析するかという基本を身につけておかなければなりません。すぐに富士山には登れないということです。

第3は、随所にわかりやすく多変量解析を理解

できるような工夫がある点です。変数間の関連について、円の重なりで表わすベン図や関連図が示されており、変数間のどの部分を見ようとしているかが一目瞭然です。また、何を核として現象を解明しようとしているかを明らかにできます。

そして、全体を通して多変量解析の意義について繰り返し強調していることが、本書の最大の特徴といえます。やみくもに統計手法を使えるようになるのではなく、「本当に見たいこと、見なくてはならないこと」を考える重要性を説いています。例えば、高齢者の転倒リスクを推定するために、レビュー文献からリスク要因を検討し、多変量解析で分析すればよいというものではない、ということです。高齢者の転倒といってもさまざまな変数が絡み合っているの、見せかけの関連である交絡や媒介、抑制したりする変数の特徴を理解した上で、適切な目的や仮説を組むことの重要性が折々に示されています。

本書の魅力は、多変量解析についてたっぷり学べるお値打ち感だけでなく、著者の看護研究に対する熱意と指導の実績に裏打ちされた、引き込まれるような説得性のある解説にあります。読者が理解できるようにぐいぐいと力強く説明されているので、本書を読了することで、きっとあなたも多変量解析をものにできると思います。